

室生犀星詩集

生きものは
かなしかるらん

美しい日本の詩歌③

岩崎書店

室生犀星詩集

生きものは
かなしかるらん

美しい日本の詩歌③

岩崎書店

画 家 ・辰己雅章（たつみまさあき） 1949年奈良県生まれ。
 テキスタイル及び染色を経て切り絵に転向。鹿鳴切り絵の会主催。
 「絵本万葉集恋の歌」「土家由岐夫童句集」全5巻「鼻」他。
 神奈川県横浜市在住。

編 集 ・北川幸比古（きたがわさちひこ）1930年東京都新宿区生まれ。
 早稲田大学一文国文科卒。童話『むずかしい本』（第1回新美南吉児童文学賞）詩集『貝がらをひろった』他。東京都杉並区在住。
 ・新美亜希子（にいみあきこ） 1971年静岡県沼津市生まれ。
 早稲田大学教育学部国語国文科卒。東京都新宿区在住。

表記について *この詩集は、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、常用漢字表にある漢字は新字体にしました。送り仮名・音訓は原作のままです。
 *振りがなは原文にあるもののほか、編者の判断で小学中級でも読めるようにつけました。

美しい日本の詩歌③

室生犀星詩集 生きものはかなしかるらん

一九九五年八月十日 初版第一刷発行

一九九六年五月十五日 第二刷発行

著者 室生犀星

画家 辰己雅章

責任編集 北川幸比古

発行所 株式会社岩崎書店
 東京都文京区水道一ノ九ノ二丁目112

電話 ○三―三八―二―九一三一（営業）
 ○三―三八―三―五五二六（編集）

振替 東京 ○〇―一七〇―五―九六八二二

発行者 岩崎弘明

印刷 株式会社金羊社

製本 株式会社若林製本工場

●乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

室生犀星詩集

生きものは
かなしかるらん



動物詩集 春

動物詩集 序詩 7

紋白蝶のうた 8

水黽のうた 9

うじのうた 10

雀のうた 11

蜂のうた 12

田螺のうた 13

鯛のうた 14

動物詩集 夏

なめくじのうた 16

かたつむりのうた 17

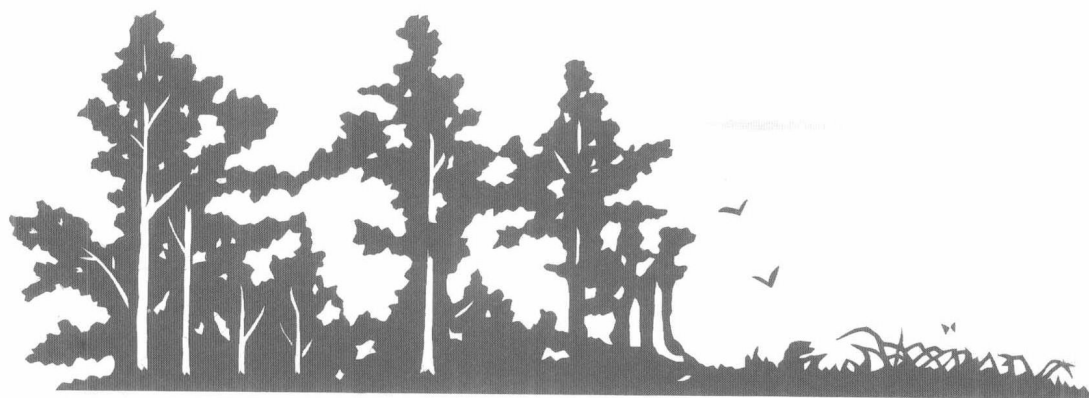
おけらのうた 18

玉虫のうた 19

蛇のうた 20

ひめだかのうた 21

鯔のうた 22



ほたるのうた 23
 いもむしのうた 24
 ぶんぶんむしのうた 25
 金魚のうた 26

動物詩集 秋

かまきりのうた 28
 こおろぎのうた 一 30
 こおろぎのうた 二 31
 いなごのうた 32
 鴟のうた 33
 灯とり虫のうた 34

動物詩集 冬

あひるのうた 36
 はたはたのうた 37
 ふなのうた 38
 鯉のうた 39
 雪降虫のうた 40
 雪は生きもののうた 41
 氷魚のうた 42



東京詩集

卵 44

雲 45

途上 46

靴 47

薺 48

学校 49

山 50

ゆうがた 51

ピアノ売 52

どよめき 53

かもめ 54

雲の間 55

省線 56

抒情小曲集

小景異情 その一 58

その二 59

その三 60

その四 60

その五 61

その六 61



愛の詩集

旅途	62
寂しき春	63
砂山の雨	64
魚とその哀歎	65
月草	66
砂丘の上	67
山にゆきて	68
都にかえり來て	69
街にて	70
あさぞら	71
とくさ	72
こころ	74
雪くる前	74
故郷にて冬を送る	74
朝の歌	76
はる	77
何故詩を書かなければならないか	78
愛あるところに	80
第二愛の詩集序詩	81
永久に	82



よき友とともに 83
曙光をめざして 84
招かれるもの 85

寂しき生命

青い花 88

でたらめな僕にも 90

正体 90

景色 91

山道 91

何者ぞ 92

寂しき生命 92

みな去る 93

装画

略年譜

解説

美しい日本の詩歌 刊行の言葉

写真提供

100 95

辰己雅章

新美亜希子

北川幸比古

千葉春雄



動物詩集 春

—— 動物詩集
序詩^{じょし}

生きものの
いのちをとらば
生きものはかなしかるらん。
生きものをかなしがらすな。
生きもののいのちをとるな。



もんしろちょう
紋白蝶のうた

卒業式の日

紋白蝶も

椅子いすの上、

紋をつけたきもので

かしこまって

歌をうたう。



水鮎みずあゆのうた

深山みやまの雪がとけ

山吹やまがきがほろほろちり出すと、

小さな鮎あゆの子が

川をのぼる、

鮎あゆの子は水と同じ色だ、

だから水鮎みずあゆという。

鮎あゆの子はひとりでのぼらない、

みんな列れちをつくり

あたまをそろえ、

尾とひれを水にはさみ

扇おきのように列をひろげる、

春のうらかな水の中。

水の中はにぎやかな春です。



うじのうた

うじでも

生きているんだ。

のびたりちぢんだり

あつちを見 こつちを見

春はあつたかいから

うじでも

生まれてこなければならぬんだ。

こわいものがいたら

よこ道をとおります。

さむい風がふいたらまわれ右だ。

あつちこつちに花が咲いて、

じつとしていられない

白いうじのねえやさん。



雀すずめのうた

君くらい

おしゃべり坊主ぼうずはいない。

耳をふさいでいても

君の声だけは

何時いつでも聞ける、

いったいぜんたい

何を一日

おしゃべりしているんだ。

おとなりのえんとつから

けむりがのぼるのは

おふろがたつのじゃないか。

土曜のあくる日は日曜で

つぎの日曜は遠足じゃないか。



蜂^{はち}のうた

蜂は毎日おこっている。

おこりすぎるので友達がない。

誰でも針でちくりとさす。

蜂はおこりん坊

蜂ののどはかわく。

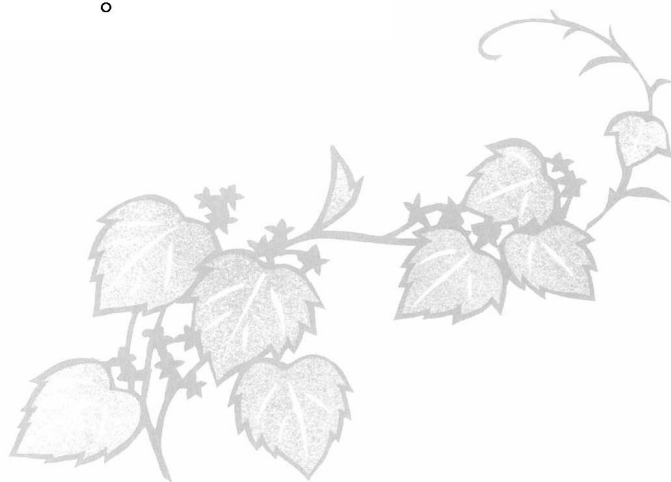
蜂は空をとぶ、

空にある道を知っている。

一ど通った道は忘れぬ。

蜂はおこりん坊、

しみじみかでおじいさんのような顔してる。



田螺^{たにし}のうた

たんぼの川に

田螺のうちがある。

どろでつくられたうちの中で、
春になると

田螺もうつらうつらして

ゆめを見る。

晩になると

ころこらないでいる。

田螺はゆめを見て

川の底にころがり落ちる。

落ちても

まだ田螺はないている。



鯛^{たい}のうた

鯛はむずかしい顔をしている。

にがりきっている。

すこし きびしいような顔です。

からだがかつしりしていて、

尾もひれも

ぴんとしているからえらそうに見える。

お祝の日にはさっそく出て来て、

いばりかえつてお皿^{さら}の上でねている。

鯛のかわりになるような魚はいない。

だから 昔から鯛は

そりかえつて いばっている

いまに 頭と尾がひつついてしまうでしょう。

